

バレンシア州立歌劇場について

澤田貴之(以下、澤): ヨーロッパの歌劇場は、ウィーンやミラノのように長い歴史を持っているイメージがあるけど、バレンシア州立歌劇場は新しいんだよね？

中田延亮(中): 活動が始まったのは、2006年9月からです。
僕は、歌劇場の創立時にオーディションを受け、入団しました。

澤: どのような経緯で歌劇場はできたの？

中: どうやら歌劇場を作ろうというプロジェクトは10年くらい前からスタートしていたようです。
バレンシア州が観光の目玉として世界レベルの常設の歌劇場を創ろうというのが目的だったようです。

専用の劇場を新たに建設し、専属オーケストラも新たに作ろうということになって、
2~3年前に音楽監督としてロリン・マゼールに白羽の矢が立ち、彼も快諾したようです。

澤: スケールの大きな話だけど、それだけにお金も相当かかっているはずだよね？

中: そうですね。お金の出資は、国と州がメインで、そして、一部、スポンサー企業もあるようです。
正式名称にスペイン王妃の名がついているのも国の関与が大きいからではないかと思います。
(バレンシア州立歌劇場の正式名称は Palau de les Arts Reina Sofia)

澤: 芸術に対する国の関与は日本とはだいぶ違う感じだね。

中: そうですね。国や自治体の支援の桁が全然違う感じですが。
でも、そのためかヨーロッパでは、演奏者サイドから積極的に聴衆を増やそうという意識は希薄ですね。
日本でいうとたとえば僕が以前に在籍していた新日本フィルは学校で演奏したり墨田区在勤在住者への割引があるコンサートがあったりと聴衆を増やす活動に熱心でした。

聞くとところによるとアメリカは日本よりもさらにそういう活動が本格的に行われているようです。
どちらがいいとは一概には言えないですが、面白い違いだと思います。

入団のきっかけ

澤: バレンシア州立歌劇場の創立メンバーなわけだけど、入団のきっかけは？

中: 2005年に新日本フィルを1年間休団させていただいて、ウィーンに留学しました。
ところが、1年は本当にあっという間で、どうしても、
もっとヨーロッパに滞在して勉強したいという思いが強くなったんです。

澤: なるほど。それで、新日本フィルを退団することにしたわけですか？

中: 学生としての滞在だとヴィザの関係などでどうしても期間が限られてしまうので、
ヨーロッパで職を求めることにしました。いくつかのオーケストラのオーディションを受けたのですが、なかなか合格できませんでした。またオーケストラによっては
法律上の問題があって自国民やのその国の労働許可を得ている人だけを
オーディションの対象にしていることもあり、そもそも受験ができない、ということもありました。

澤: 自国のプレーヤーを優先するというのは差別とかではなくて・・

中: そういうことじゃなくて、やっぱり、自国の雇用を優先しているんでしょうね。
自分の国の演奏家にまずはチャンスを与えようということで、それは当然のことだとは思いますがね。

澤: そんな中でバレンシア州立歌劇場のオーディションを見つけたんですね。

中： ええ、ネットで見つけました。オーディションがニューヨーク、ベルリン、など欧米各地で行われるとのことだったので、僕はウィーンに一番近いベルリンでのオーディションに申し込みました。ところが、ずっと連絡が来なかったんです。

澤： あらら。

中： 書類選考で落とされることもあるので、だめだったのかなと思っていたら、しばらくして、連絡が来ました。そしたら、ベルリンのオーディションはマゼールの都合でキャンセルになったと(笑)。しかも、他の地域のオーディションは終わっているので、2週間後のヘルシンキ(フィンランドの首都)かニューヨークのオーディションを受けて欲しいと言われたんです。

澤： どっちもウィーンから遠いね。

中： そうなんです。それで、ちょっと迷って、ヘルシンキのオーディションを受けることにしました。それからが大変でした。ヨーロッパ内の移動って日本からの海外移動と違って飛行機が小型なんです。だから、チケットを手配する時になって気が付いたんですがコンラバスを積んでくれなかったり、積んでくれても高い超過料金を請求したりする航空会社が多かったんです。

澤： 大きい楽器だとそういう苦労もあるんだね。

中： ようやくOKの航空会社を見つけて、現地に行くことができました。

澤： オーディションはマゼールも参加したんですか？

中： はい。彼は全部のオーディションに出席したそうですよ。その日もオーディションの後、夕方にニューヨークに移動して翌日はニューヨークでオーディションだと聞きました。マゼールはニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督でもあるから、世界中で最も忙しい指揮者のひとりのはずなんですけどね。

澤：すごいエネルギーですね。マゼールが同席したオーディションはどんな感じでしたか。

中： 最初にソロの曲で。マゼールはずっと腕組んで聴いてたんですけど、聴き終わった彼の表情を見ていると感触として掴みはOKじゃないかって思えたんです。で、その後、オーケストラ・スタディをやったんです。

澤： オーケストラ・スタディってのはオーケストラの難しい部分を集めた練習曲集ですよ。

中： そうです。その時は、最初に運命の2楽章をやりました。演奏終わったら、マゼールが「もう1回やってくれないか」っていうんですよ。

澤： ええ。

中： でね。今、君はここのところをこういう風に弾いたけど、そうじゃなくてこんな風に弾いてくれないかな、と言われて、そして、ここの部分の音程をもう少しきちんとやってくれ、君ならできるから、って言ってくれたんです。

澤： すごいね。普通、オーディションで審査員が話しかけることなんてないでしょう。

中： オーディションで審査員と会話するなんてことはまずほとんどありえないのでびっくりしました。しかもミーハーな僕としてはマゼールというだけで舞い上がっているわけですし。また、同じ曲を2回演奏してくれと言われたのも驚きました。ふつうはオーディションって1発勝負ですしね。でも「君ならできるから、もう一度」と声をかけてくれたおかげで、

ひるみかけていた心の背中を押してもらえたというか、勇気をもって弾けました。演奏後もとってもよかったよって言ってくれて、マゼールとも話ができたし、まあ、落ちてもいいやって気分でした。

ちょっと脱線しますが、たぶんマゼールは、幸いにも僕の演奏からなにか彼の気に入る素質を見つけてくれて、それを確認するためにもう一度演奏してくれ、と言ったのではないのでしょうか。ミスや傷の有無よりも演奏者が持っている潜在能力を見極めてメンバーを選ぼうとしていたように感じられました。

澤： オーディションの結果はどこで知ったの？

中： その年の春、栃木でマーラーの「復活」を指揮するために帰国してたんです。筑波大学の医専(医学専門学群)の恩師の家に泊めてもらっていたんですが、先生の子のパソコンでメールをチェックしていたら歌劇場からメールが来ていました。どうせだめだったんだろうと思って開けてみたら、合格の通知でした。

澤： そのときの気持ちは？

中： いやー、うれしいというより全身が痺れましたね。これで減っていくばかりの貯金やヴィザの期限を気にせずに自分の力でヨーロッパで生きていけるのが心底うれしかったです。

そのあと、諸手続きを済ませて9月から団員として活動を始めました。

スペインでの生活

澤： 歌劇場での活動はどのような流れなのでしょう？

中： 作品によって増減はありますが、だいたいひとつの上演に対して休憩込みで3時間のリハーサルを8回やります。その後、ゲネプロ(本番前の通しリハーサル)を経て、本番となります。

たとえば今シーズンの演目では、「フィガロの結婚」「ドン・カルロ」ともリハは8回でした。本番の公演も含めると3週間で1サイクルといった感じです。

澤： 新日本フィルの定期演奏会なんかと比べると・・

中： 新日の定期のリハは、実質4時間を3回くらいでしたね。

澤： 日本のお客さんとスペインのお客さんは違うのかな？

中： 違います(笑)。例えば有名なアリアなんかを歌手が歌い終わるとオーケストラがまだ弾いているのに皆、拍手するんですよ。歌謡ショーの拍手のタイミングと同じ。

澤： それは、オケにとっては、ちょっと悲しいですね・・・

中： 悲しい、というのでもないんですが、日本でもウィーンでもそんなことはなかったのが、最初はちょっと戸惑いましたね。ただ、モーツァルトの手紙なんかを読んでも昔は交響曲を演奏していても途中の聴きどころが鮮やかに決まると拍手してたみたいですけどね。

澤： 確かに今のクラシック音楽は、形式的なしきたりみたいなものが増えすぎてしまっている面もあるかもしれないですね。そのほかには？

中： あと、その割に拍手があつと言う間に終わっちゃうんですよ。

澤： へー。

中： あんまり盛り上がっていない演奏だと、もう、カーテンコールをする間もないくらい。(笑)

澤： 音楽はもう十分だから、さっさと家に帰って食事でもしようって感じなのかな。

中： そういうノリですね。日本の暖かい拍手も演奏者側としてはとてもありがたかったですけど、スペインのマイペースな感じもそれはそれでいいなと思います。

澤： みんな、自分の人生を楽しんでるって感じだね。

中：とはいえプレミアで変な演奏しようものなら翌日の新聞の批評欄でしっかりたたかれますし、テレビのニュースでゲネプロや記者会見の様子が報道されたり、公演のポスターが街のあちこちに貼られたりしていますから、お飾りという存在ではなく、住民の方にも活動をしっかり注目していただいているんだ、と実感しています。

ロリン・マゼールについて

澤： マゼールは、現代最高の指揮者と言ってもいいくらいの人だけど、彼と一緒に演奏できるのは・・・

中： 本当に幸せだと思います。世の中には多くのいい音楽家がいる、その中にすばらしい音楽家ってのがそこそこいて、更にその中にたまにすごい人がいるんですが、彼はその「すごい」の中でも上澄みの人って感じです。現代の巨匠と呼ばれる偉大な指揮者達の中でもマゼールは更にその頂点にいるように感じます。そんな人と音楽ができるのは貴重な経験だと感じています。

澤： 彼のすごさを言葉にするのは難しいと思うけど・・・

中： 彼は恐らく世界中のどんなレベルのオーケストラを指揮しても、そのオーケストラのベストの力を出し切ることができると思います。

例えば、ここはゆっくりやらなくてはならないってところで、その「ゆっくり」を実際に表現する方法はたくさんあるんですが、彼は、その方法をたくさん知っていて、そのシチュエーションで一番適切なものを選択することができる抜群の能力がありますね。

澤： なるほど。

中： 車でカーブを曲がるにも色々なバリエーションがありますよね。ゆっくり曲がる、道路をはみ出さんばかりに猛スピード曲がる、ぎくしゃくしながら曲がる等等。マゼールはそのカーブの曲がり方のレパートリーがたくさんあって、その時にぴったりの曲がり方を選ぶ抜群の能力を持っている。そんなイメージです。

中： あと、プロのオーケストラでも演奏中、トラブルがあってオーケストラが乱れることはあるんですけど、彼が指揮していると、そういうことがまず起きないか、起きても瞬時に修正されるんです。それだけ、曲の全体がよく見えていることと、演奏中にステージ上で起こっていることを把握していて、その時に最も適切な処置を実にすばやく把握してそれを確実に実行することができる指揮者ですね。

澤： 職人肌の人って感じがするね

中： そうですね。究極の職人。でも、言葉にするのが難しいのですが、その職人芸は決して彼の音楽の最大の魅力ではないところがすごいと思います。それはともかく、持っている引き出しにすごい余裕がある感じがしますね。それにオーケストラの各パートの音を、実によく聴いているんですよ。その聴く能力は本当にすごいと思います。もちろん、指揮をするテクニックを卓越していますが、オーケストラの音をよく聴く能力があるからこそ、指揮のテクニックも生かせるんだと思うんです。

澤：是非、来日公演してほしいですね。スペインにも聴きに行きたいなあ。